實隆公詠草

緒題

特別
へ4
8066
4

N4
8066
4

< 95-230 >

告題千首和歌　文明十六年七月十六日

立春子日

小松原はるもしるくひきそめてみとりは千代に世々のめくらむ

霞中鶯

鳴てこそかすみの中も鴬の谷の戸は出てありとしらすれ

若菜隠雪

山の峯は雪ふるもまたうすゝきてわかなに花は見えかくれし

梅香移柳

吹よする梅の花さくそのにほひかねてふくやまかはるの柳

易厭折花

花我乃と家にしてあらしひかすはなき春乃山ぬと

春雨放駒

雨乃中はなくさうすなと雪まとかあらぬ夢ねなく金駒

鴈勝呼子鳥

よふこゑよふしあやるしなへ我こしぬかのいそ山ふ

苗代堂

種我田くわとかるしにうらへ吹山田乃うらにてすれる

杜若似有

うちうけを汀乃有も池水に文我へてぬきけるかる

對歎久と情美

ふしおしまとなとの中のうにはなへ寄けるい山吹乃ちる

更衣日見卯花

う乃花乃垣ねしに雖うしかさねかの袖乃とともみぬるしる

梓蓑聞郭公

ゆるおりまあふしのもろつかけてもあらぬ乃ちつ忘

蒲交早苗

山ひ乃沼まふしけるあやめるに果苗にはしるしてうまは

昭射厭雨

ひさしきまもつおやりつるさ月山ほくの松も忘める雨夜に

橘下憶蛍

ほたるをもしたしみて君や立ちなりけりしをつを夜の狭に

蚊遣火近蓮

やり火乃焼いふせるかをひ風にかはまこれぬ池のうちすん

お宝忌夜（泉に）

お宝もかこ山のうちはこぬほとやすしとおもふやとのまりの

六月立秋

いとはやも秋をつとしか川ぬの月のさわに夜ひくしこ

七夕萩

萩の花をふひこ星のみまゝに君にいけるなし思の思ひ秋

女郎花蔦

いけしかも手花にしてなくしなしまふしる初見花かな

苅萱蘭随風

おなしかゝ風にみたれてかゝやしまかしなり寸春ゝか風式

庭萩鴈鬼

風すきふ風のきの萩乃そよそよに思ひ井のわも愛ふなり

廉卧露

なりし廉乃あきのなしまふしすれて家我家と聖へにかたし

旁隣樓

日新風てうへ花の雑かかも旁の風のうちに上りれてうゆく

駒迎翫月

雲の上の色とおもはれぬ也ら月の名ぬむまし弱むふ物

楊家隠出繁

うらみこれもつくしれてくる也の愛ハ長さしに風とぬるるの

紅葉帯風

庭の面の紅葉の手ハ撞ひ手ふうとふろひそしら田の上の露

九月初冬

ちらめきし秋ハ名のとう長月の日数のうちに冬ハきにけり

時雨先霜

しこれの君ぬいまハ藻のやの所知しさ見しきこれ袖

悲雪埋霰

しこ朝の風の風ようこまころ霰の雪にかれぬ思の松の弟

芦間千鳥

みるとの塩風さしとあしのもにかくれしいて次立ちとりの

水上水鳥

ぐらそふ面水の人にせられ白つ名のとうさ秋の池の手ハ

細代神楽分処

田とやあしろの庭もさしらしさらはうふ長ハふけぬ先の

鷹狩馴炭竈

狩くらはふしやかるしごまり山すらやく鹿りやとりぶハ風し

嫗追深夜

開おしてたるや梧の丸木にぬる紀鈴庵の山乃ようしら

海路旅

かなしせしおもふ方にあゆきしていやとゝまさるゝ永乃上りせ

山ハ永餞別

まりかゝりましさしかとゝまる礼の向うるかやって山乃ふらら

田ハ永懐旧

うらまさしあひらふ茂穂のおらぬるに長罠のあれ礼ゆる

夢ハ常お共

あるもやハ為ハ我ハ人ハ何事し昨日乃爲乃あて世年

寄述懐祝言

我なるぬ為乃祢りしかるふしか君子世ませといの一事

詠源氏物語巻々和歌

桐壷

なくこゑ奥の野ゝに玉のおかへの世乃ひかりめぬきけ面

箒木

[illegible]

[illegible]蝉

[illegible]

夕顔

[illegible]

若紫

馬祿うしなくしもうしむしさ花乃色わとしにふる雲あ

未摘花

袖ふれてまつこゝ也す若にたつる花やあやなき名にみそ

紅葉賀

君こゝ以ハ紅葉のうち乃秋乃色しおもふに所乃はなりまし

花宴

おほかゝにみさりし花乃夕はへやあらはあさる所乃と乃え

葵

花乃にこのほとゝ名遠とやあふ花草をもてしさ所乃ゑれを

賢木

香我と見てる物さう木し神りきに神ハ拾さ恋こゝらも有

花散里

多へ恋ゝ紅し祝えたらゝ名の花ゑる里うけ乃にかりせ恋

須磨

浪風乃うき木こゝしほさへやたれ寸ゆ乃思ひそふる

明石

立てわらきゝ以てゝ御ゑりし火のありの波う世もこゝろ

澪標

えりしわれや身我にくしてし年月のさしこゝろ位ゝ人神

蓬生

分て紀家の紋のなしもしきふまの紋こゝろ月日なりし面

関や

人をもすゝせきゐいかなるなれ又はゝなるにあふさかの山

繪合

海山乃いかなるにたゝまりしを岡乃ゑみ乃水ぐき乃ゐと

松風

ひとゝこしけ山の名の中しれおもしきみ乃やとゝ乃けりせ

蒔雲

かりかりし世ハ蒼渫乃夕ゑ也れなし一乃見乃うに雲

槿

胡かなとみしれなかゝ、いくれしたの心乃色ハうつし

乙女

思ひしやゝ乙女乃色かゝ神世ともいふとゝわたる雲乃通路

玉鬘

玉のはゝきてぬきらしれ家にすれ家ひとゝれ人のゝみみ

初子

君のゝ子とせの玉乃初子とてみとり乃松ゑはまつれて人間

胡蝶

こゝむ、なら与ゑ和ゑしし何の恋花そのこゝろふまさてさるれ

蛍

ぬし

[illegible]

躍麦

[illegible]

篝火

[illegible]

野[illegible]

[illegible]

行牽

[illegible]

蘭

[illegible]

撫花

[illegible]

梅枝

梅花[illegible]

友裏葉

[illegible]

若葉上

[illegible]

同下

万代とそこなふ法乃とつらまき乃四寸のうち乃ふ乃たうとさ

柏木

末はねに成う葉もり乃神そとハ云れしまき乃食しなきけ

横笛

はらはらし束の世ニ多化繼行しにおもはぬ風の事せとうそん

鈴虫

すゝ虫乃聲をはけてもさすつかぬかりすてきき遊と成し

夕霧

へゝてあらはれとハ志れしまきりの志まし名乃こそれん方なき

市法

破土姫なる祢りし乃おとみてなふ乃ゝのわう世にぬ人なき

幻

明ら礼乃夢に幽ゝ礼しあれ我に幽ねらへと幽かつもなる

雲隠

以ほ見まる雲のかけ見四方にはうゝ元ゝ月乃名乃ゝ殘りて

匂兵ゝ宮

うはしもて花乃ゝ見ゝ也もとゝの姫ゝにたふ袂なりし

紅梅

あ乃花にいとれ恋ゝかけ以世のかゝれ宿せ紅梅ゝ

竹川

はるかなるしもこちら出しあれば行川乃急れぬふまなと残れる

橋姫

りし姫乃心我のうや明なくきつ川きりにおもはしてる

椎本

よわそりしかなまずらし恋三井のもとかとけのこゝろやうこゝろ

角總

よるまあそてるしもあやしのあまきりへてなまとなるぬ

早蕨

こしへのうこゝむかし他宮さて乃袖からめる寸峯のさけ

寄生

人乃世の孫さしこちゆめやとり木のもとなるおもはしなまおもふ

東屋

あ川ゆやれあまりまもあるゆゑ夜にきて蓬の丸孫せもとは

浮舟

ほくとけ乃ゆゑ我たとるまはけうこ木今うしつこけ

蜻蛉

かゝろふまなまかことなるとはりを極ふへの色まなめけして

手習

おもふまやこあまるおりくはたてなしれのあと人しかなき

夢浮橋

うちわうしきゝ私しおもひのおかし世ゆいつかとかゝ夢かうき

右一巻天文武年十一月廿七日ニ江州石山寺観音奉納

世尊院

御元そや世ゝ事ニのりし巻くのあまもあまる筆のまわりハ

ゑし

花しかるをとりく家乃手向乃を山ふところ乃外まゝ事とも

又奉納当冠歌

ゑしこゝろハ内ハ冬しり梅しさくわ世乃雲ニ御しるへてこゝ

故四寺にありしうち所くおひてきしまゝを四社の

ゑ乃御製世一字をりしらにすへてのうつきてなん行

わるしや昔しおかし秋うとハおもふあまる袖乃夕ハ掛

ゑ世乃夏ハ我こうろ乃あるへハみしとも知や朔りかのたる

世中のあらしさうる春の花秋のもうちにうろひにかわ

けひかゝ御萬ハ紅葉の松の門秋をはしるやくゝ人たるし

ひ乃ひかわさかりにみ掛る朔家もなくなきてそ乃谷乃音菓

みゝ内くに朔夕家乃下そめしかくかわ掛く秋乃山かる

きゝ内ケけふしろと山のゝ秋乃夏ニ明やらぬ夏の月ハ出ハ

のへの家ゆくてにわれんやう草やかふり乃あと乃なこうたる孫て

ちきりありてむとふれしき山の秋乃よしあふきとなるく

古寺

神な月いまし雲秋にうつしてよのこうろ菊の豊のあかりは

[illegible]

右廿一首者永正十三年九月廿八日依
後土御門院第十七回聖忌於般舟三昧院御
法事自廿一日被執行之間時ニ被詠之歟奉
作誌之

通村

花卅首和歌　永正三年三月十六日　三十八也　勅題

見花

野も山もみる人よ花盛おもしさてに雲にかゝりて　後柏原院御製

翫花

我宿の梅にならへる春もかな今をぬすみの花のにほひ哉　實隆

折花

風の音もしらぬ花の色をゆるてたおらん人ぞ分も　政為

嶺上花

へだてつる花のかゝるの雲ならばさつとも色かはるらく　同

野径花

しかなくや草の花をわけしたるぬのくるけるに花を善をつくさん　實〻

河花

まりうらん狂ひやせやうかう岡に花の分る山川の水　改〻

岡花

釣ひり花まあふさかへ志れぬ多かかいちと善にさてめん　四〻

破花

一入の多しこれとや破の松花の波こす善のうるせ　實〻

花似雲

花まかうにしろふしらる山桜やうつきにおに無ふ也　改〻

花似雪

みな岡にに積我花とも思はいらて雪のうてすかふ多かな　四〻

月前花

見積のこれにも我花やちてすも木ろ乱かける勝月　實〻

風前花

こそふ若まくれいなるに我さ守の又よきてし吹やうなの雲　改〻

雨後花

立よれ花に殘る雨そ花よりしも多し袖に志れて　四〻

禁中花

ゆまれしらのよもしいしたるす善殘へて花ハいまきの雲の上　實

隣家花

我ゐ地乃花ともいふ物ゐ事あれ乃へそれハ　改ニ

雨中花

草花をみてゐやすくしたゞむ花をかけゐる淺茅の宿所ニ

草庵花

ふりもつる草乃庵乃雨にしまゝ可れ人ふ乃花所ハ　實ニ

花留人

立さらぬまゝ下ふしハ花もひとしにあるやおもしあるも　改ニ

惜花

あるゝまゝ雨まゝ所ハ雨とかりしさてそ寸花の所ニ　世中

落花

まゝさらはありてまゝ世乃とかりに世ハ人をせ花をとれ　實ニ

芳花興志

咲花乃あらし興ハ云しかもしたゞ雨よくらゐ神をうゝ思ふ　改ニ

ニニ逢ニ

かとしゐき愛に雨さるゐ春の夜乃ふゝ乃ふの花の宿里ハ所ニ

ニニ別ニ

夜乃袖まみすをしこ春花をけれゐる人ゝ淺ゐるぬ　實ニ

ニニ寥ニ

りきくる可淺まこれ人ゐハ寸れハ花乃ゝけ人ゐ　改ニ

ニニ恨ニ

人もうらうらしなくし目の田へに外なる花は根やはある 四こ

寄花旅

思ふ事ある知の夏はかまなりて花はおとろくよろの山風 實こ

ここ夏

おもふうやもかなくし花さかぬ春まは有とし夏なれ よろ 詠こ

ここ述懷

世に言ひおもふやいまちさしの花はおもふしせ里夜を四こ

ここ神祇

葛のもれうみの秋は立つの神の心はいきし花うらふ 實こ

ここ祝

花はそふ君の光は我長は祝ち玉人のうしとやせん 詠こ

詠三十首和歌

細江漁叟

早春水

おもしくとし漸なしと祝さしの水とは守める水の北とけさ

子日

ゞ寄たくこしも小松の宮の今へ今ふの祝の日我おとろ乳つて

梅薫袖

いしの袖まへ今宵掛のかりおおもふこゝろ我せしけふ今

餘寒月

よ宵ハ月ゑわうへ雪もちる雪し君にすこてさ掛る蓋風

感花

来宵といふことも我忘れたれ今こうみるまゝ花乃さまわかる事

花随風

風やかと花やもの花とみしわりすこまもかもみれてうちる

菅春鶯

かくるもおもふこゝろまゝかたられしとわれ我去にけふ可うなく

刻刻

まるやとにかけかとさてうしし鳥なとしハ山まの一宵をうきし

五月雨

浮沈宮雨し袖まゝ志しかれ世にかゝる我うき身乃今月雨の宮

納家

老ぬれもそへぬあつさもそれなりうすゝ鳥風やそこにしむ

七夕

衣かすあふ瀬やあ雨乃河屋しろくる袖秋今ふ我なぬりに

蒲似袖

花すきまぬ井乃水にいまみせて也とふも袖まさも紀家ぬ

深夜虫

なく虫のなかの虫のねはねなくうもう東さ無我恨あり世間

田上鴈

紅の袖はの家になくかりの嫁かにいてなひく秋の世

山家月

初すてらもうかりし秋の東の袖けるの月に山せろ袖を

惜月

今月の東にはなほ寒我いそくきにはふく秋うしふとも

紅葉

家の前我秋の草木のうへにそれまてて初るかるうみ紀

寒草

初霜の袖我のこ萩えん秋に契るぬ花を今もすき間し

水鳥

あしへ行鴨の川なるしけ此ハ間ろに寒きうき秋をうなく

庭雪深

かゝ袖けるしれやの初のつく間て庭も雪の雪の紀此式

思慮

ことさらにはそり出るしけ秋さのそれしもおもふるを思れん

夢中恋

さ絶さるしみち有とてしも逢事我筆にしてはいかゞ也

誓恋

[illegible]

歎名恋

うき身我はわかうき名うとおもふ人のあらんかとしいかけまし

恨恋

[illegible]

曉鶏

そら[illegible]

岡中燈

[illegible]

羈旅

[illegible]

述懷

[illegible]

祝言

我君の子とせしあかぬいまし[illegible]四方のこさ

報贈細江漁唱三十首和歌

山城介都知音

早春水

年[illegible]

子日

たきわかれ今ハ乃孫乃たれも美哉乃と都ハ乃松と云なり

梅薫袖

袖ハ乃れし哉志のひて此なるさいわ身におし花やと乃梅て

餘寒月

加ゐに美乃和さむ乃月新なさそ旨孫さ也乃宮乃山里

感花

と雄乃さのちるし以ふ事哉わとるもけ乃ゐき綿ゐ花やとる也

花随風

花と以へとそのゐ多ゐ小なしいてこゝろや田し花ハゐて美乃ゐ也

蓄ゝ雲雪

久留ゐ都乃美哉志れすハ如ゐ寸哉族と雪やなく

郭公

ゐてひしこれ神山も遠ゐ熱宿にけり哉ゐとき寸ゐ

五月雨

年ゝに如ゐるゐうき世乃五月雨しさゝに心にけきゝ寸比

納涼

松々寸此山川乃すゝしさゝ手に雨せた雨秋も有ゐ

七夕

白ゐまゐ衣も川屋しゝかし乃手向のゐ也ゐ祈けゐ

蒿仙軸

偽の軸成るせてや花すゝ人今の絶なりも寸乃草まは

深夜虫

いとにはもや虫乃多くもわあれせて鳴高い至るぬらん

田之鴈

人間鴈も山田になり寸立てといふそなりの風乃たまはせ

山家月

ひさしやはおもひもやるし秋乃月さらぬさら山らなりと

横月

出るゝ人間ほどはいうきて山乃そのうへもしる寸月也志

紅葉

家雨乃なきて紅ゝ間ゝるみとてこの葉にぬりき笑成う思

寒草

ふるはまゝ毎ゝ寸花乃えん秋成思ひなおもらう家乃荻原

名鳥

立之間白鳥成さるめらるゝ鳥乃鴨の川波せしつかわ

庭雪深

あけ絶きて世乃光なり間宮乃雪乃しるぬしのやしかれ

悲窓

ことさらに志る世間なりしれるもわかしとてこ絶てやこぬ寸

なり

夢中惡

[illegible]

誓惡

[illegible]

欺名惡

[illegible]

恨惡

[illegible]

嚏鷄

[illegible]

閑中燈

[illegible]

羈旅

[illegible]

述懷

[illegible]

祝言

[illegible]

廿首

春曉月

[illegible]

獨見花

[illegible]

風前花

[illegible]

惜殘春

[illegible]

歎冬露

[illegible]

雨後郭公

[illegible]

樹陰避暑

[illegible]

萩風告秋

[illegible]

山月

[illegible]

月前松

[illegible]

月に掛く雲の絶間をとて山風や松の絶をなして吹の分る

十　栽菊

霜にかれぬ袖かりゝめや秋の菊風にちらぬ花をうへて

樹寒衣

うゝ[illegible]にほふ雲や白秋の[illegible]ぬ[illegible]

冬　曉月

[illegible]曉のおほて袖に絶も花つまる

落葉

[illegible]

寄月恋

[illegible]

[illegible]

雲の恋

[illegible]

雨

[illegible]

風

[illegible]

海路

[illegible]

釋迦

寄やうなるをのうてかのきつ乃さるへて君ぬすのし

とゆしき

詠廿首和歌

世中乃うきこと田ゑれすこし月のいふ白こてて恵ハきぬるし
忘れすら花まむりひてうけせこの世ぬるくらいしらもきぬ乃宿
別きに面長やむし乃月にこれ花にそして名のこうりけら
名をうとう乃世にきこしのまいこしきてけるの山部ひ
蓮るのうへとのきやハ人ハこしにうよ志まぬうこ乃こうろ我

きて事もをろ礼なの夕なくなれるの秋の初かせ
露きてし木の葉ごえ花うれ秋のなこりなくまもみてしか
かくれしうしこも為なしむとてしかの月なくなりみつらして
ほ為まう乃跡をもごめ寸村伊田いつれ乃雲なく忘とうん
ゆ見た花のこし詠乃雪乃拾きうへ跡なくやこに荷ねてわそん
むりしとて思ふの草なくほ乃ぬへき拾りなくどうん聖人なりしか
桐のえにきてそ見し世乃あそ礼乃ミこうへ乃うこに乃ろ秋
ゆましあらて鴫乃り孫りき百にはやあまりたなく君よりそへん
ほ成しかのおきぬしまちゐ為ほ成ゆ嶋の道の外なる為ゆやおふ
有ご為なあくる日ことまたのめとや昨日の夜のうつにならいこゆ

田かろしれ木のえ草乃ゑ今寸もうわ乃寸うこはおなし世中
枝のうへ有しにもあら寸水の泡のうこかくいの花とみましや
山の井乃あさしやはおもふ三十あまり三日ふむまて礼志ふ為
ゆくおもへ為なく詠まてれとに心なきとの為のことのへ
いなけまのひかわのうちとおもひこしかなりさせうあくの西の緒

住吉法樂三百六十首ん 初の積元父ニ詠奉之

早春浦

[illegible]

路雲雀

[illegible]

通のへの芝生の庭[illegible]

開花

山ゝせの開[illegible]

[illegible]

夕歌冬

凡我國川といふ所にかりも夕房乃ふかれてかふ山吹乃花
得てこゝろもとゝ乃萩のえかれし八重山吹の房乃ほふりせ

菅屋雲

年くまる乃ほふ寸と様く雲もしかこか絶望にくるゝ春かな
絶まみてゝいりまゝてこゝろあ國雲乃様くゝ忘てゝ春のわかれ

夏夜

秋我まゝ星のやとりし新すゝてゝ夕やゝすゝし天乃かはなゝ
夕屋のほらゝわけまゝすゝしきかやり水とゝ夏夜乃くわ火

樹陰納涼

ゝこゝろ御下葉ハ秋ふさまに立て宮さ絶ゝら出かけ乃涼さ
夕すゝ木の國乃凡う秋さてのふ凡くしの月ま國さ行留

女郎花麁風

なれけとハいへれなりおもふなゝへしおほろ聖人の風の心ふ
あらなりと名りやおかの女郎花風とふせまなひ寸ゝ

海邊庶

あとちまあつれうゝ山凡こゝろなく鹿の名ゆしかるゝ

池月

鳴とり乃あしゝ乃いとなく池水の月しかるくむらこゝのけ
池水の水中ますゝて津の國のこやとも月のふさかるゝ

松間紅葉

山せし
秋の風おとこまに吹う下紅葉かけたのもしき松乃名たてに
下紅葉あかすやうにしくるん深ぬうちに秋松にはらさて

山雪

かきはつよう乃山路乃ゆくれをしけさみう宿乃松の雪
交二人分し雨雨にかゝしん雲井ろ三ねハ初雪のそら

夜歳暮

又なくとしのひりし哀なり身ハいくつ乃宮のごすし欠
分し暮ぬるやらふら乃それなりて極く年のやのやさ我思

寄剛恋

さらくとかみせ恋思ひ乃剛にしもなく我あら浪の音くんとすれ
うこれなき人の心の清れなさそおもひ乃剛我我に病かれる

二千鳥二

志きまふる袖のこゝろ我おもひやれこぬ夜乃月小子高鳴覚
たきおしあとしさうなの夜くに音が祈をうへて寒ろ寒らん

二扇二

身ハはやく秋乃扇乃国のうちになれし地とし花れやかすら
うし月乃いるゝ乃山にあらへてし扇の風のゆく志我うごふ

嶺橋

花乃春に春ハの秋の手との枝八川ほとあらぬ玉橋なる

うたそふ爲る山桂君が代ハ雲野ゝ[illegible]おしのかゝさて

田家秋

かに出るわさ田もあれとなく廉やわかゝ乃萩乃花ゆゑふれ

心なきうかゝかし絶秋なりやらこゝまいれのまゝ萩まりけ

布留

石上あふくしわりし秋乃雲志ゝ[illegible]ゆゑ[illegible]すゝ乃木たかさ

昔那説

那乃西すこゝハ那こそ住りし乃名しうるへての代のためなれ

代世賀喜

湖霞

うつもれて松しさへ浪間せ越ゆるこしの二寸三寸の峰　肖柏

竹裏鶯

ゆへ想ひとしいらし鶯のこせ越まのうの人をれ寄けけ　實隆

梅留袖

もりかこそしかこそかなれとも梅花りしまつ此の袖のかりう　肖〻

水邊柳

さしのかの小舟やいしく夕鶴川せ出さ作まて柳の二寸　實〻

帰鴈

この祢よ中のかりう越こそもの一節ゆし曙の空　實〻

春雨

花ゆれあらしし常の春ゆいこそ上ゆうれぬ雨ゆ夕言の宿　肖〻

栽花

うれしふ宿の奥ゆ身ゆへてきて井の花の種とゆれ越　肖〻

折花

おりの二寸花はあしの枝をみらかゆ寸はおれふ袖もしそあれ　實〻

春曙雲

春の夜ゆるゆる雨やう寸ゆの月にしそめし峯の横雲　肖〻

松上有

うゝむ雪風のやうの乃れ我しもきのむまさやうの有浪　實こ

悪恵

旬しかすまさ悪ふの山路いまさもあらんとて世のさ利とも　肖こ

不逢こ

ほれ行きかけてい向けし此心我もこの頃志ふに思ひなすは　實こ

契こ

さ乃こゝ思ひまふ雪風しきてぬ興我多くれの宮　肖こ

後朝こ

月東乃心我をてし朝家のんかるや又とおもひきはしき　實こ

恨こ

あられ又下葉の秋に物をおもふ花しいとみえ萩乃上露　肖こ

曉燈

待出四月は有明の宮の内に三井てつれなき東北の竹　實こ

山家

さ宮しさらおもひしそ久せ花に礼本のさに我今某乃庵に　肖こ

旅行友

ふありてとゝ四人ら知こりて乃名ゝ乃しらくさめ方を　實こ

述懐

世乃うきこしおもひし絶に記ら我さう乃むりしや今もくるかれん　肖こ

神祇

自向ても多あるゆとめふみぬ神もりつかしなかへとへて　實〻

明應八年二月廿二日

右論和歌之形容者是播岳夏候湛也合寶嗤之
陳全首頭之壁尤弥重〻〻縱覽則一偏不堪感
興命退筆所写也重可清書也

後撰吟集三云

愚亭へ入道前内大臣實隆公九月十三夜きたりてゆ
ひたりし物に月なりしかはれしをわかる申（かくて）をくれゆるこそ十三首

堯空

（かくて）
此歌所持之百本内略之

文亀元年九十三夜雜言冠墨一字　小杣樵士　枕井文　堯流

なりけるに何のをして甚らさるに月の名におふにはしかるかき
かきりあれはこゝ孫かわ人ま月ゆ事てかくしく雲にのこる山風
はみるすゝこえそ名にかりさる山河乃きくの高かいそきそ
昨日ハとゝれし何の乃ゆことハ川くのやまも秋いおほえて
わちきまきかの如来こゝろ我もまれまへてぬ秋我れ川く
こゝかもにおもそすゝ月こゝとりしるき花をそふる
をゝ礼てもさきまかふ花ときくかゝまゝ我ますすくしうきかゝる
かゝこゝこゝ色はまハ三の人もろきゝ力乃高こそか礼めうへし三の菊
あさ花るこにゝ人をあらす深のへてうき世を秋のこゝ孫乃悄く

この事ハ我きこしめして以製我意をのべ給ふ世間世
七月の名おふ祝しみさわしハ何ゆし袖や世におもひしかも
かうまの雲我を袖にかけ世て山風雨寺月やすむらも
法れしかきこそめしに花の花なること山の松の君のなさて
小にもむ石の龍の末の色しわきてしるかや見すもし
法師の岡伽さ家岡つ花をもらおりちらしてもおきてもなし
何しも何遠我うおもひの秋の月老とかゝ教まれて我
そのくえのくら山路の秋の菊ハ我ハ分れてハ君うみ人き
りれ物ハなへて乃花の家乃とゆきてにかりをこう万代の秋

あらし世乃夕青乃外に深ゆ間あらしの秋をこりや
彼おて雨ゆる我月しきらふ見ゆ人ゆ袖乃をれに
涼岡に月のひかりしわさわきあし乃すれのうしや世中
みな雨くにおとろへ物きて菊の家をかゝ又うむらも
ら乃法師の紅葉にしらぬ霜をへて山ごしつれ乃雨をの
十月三日二乃御製をうしけるまく申とれ云
堯風上
天法家の事ても三ぬことのもや山としてもなハしめかるへき

小野奉納十二首和歌　明應九年正月　宗祇八十算

霞

[illegible]

若菜

[illegible]

花

[illegible]

郭公

[illegible]

六月雨

六月雨ハ岩祢にあ雨ハ濃の象乃落そふ粉や垂乃玉の緒

納涼

[illegible]

秋野

[illegible]

月

[illegible]

紅葉

[illegible]

千鳥

まゝ我もて和尚乃間をせるまゝそ忘れぬ君乃女子ゝ

歌

あしゝ川のかけゝる池乃ふすゝ水にこけゝる春やまつらん

雪

若またゝき雪乃やゝ内かゝ内奈もかゝりぬるこしゝ我さらに

へさん

西郷明月論之詞云

やまともろこし月我もてあそふ

亜台府實隆ニ

寝さてもかたきかてみすハ共并原月もやしらかなし

月とゝそまわれ我いさらへ夜しすがらしの雲のかの南無阿弥陀佛

月下相答某拝上

和答

諫議大夫基惣卿

長秋乃義景我編するまいおほく秋我賞し花月の風光我既にはまさりに月我さ花と須申まし仲秋三五乃天ハ毎歳百千乃奥ありてに貴公子明日此佳辰に寒雨の噴あらしと我をそれ云ふ夜の清光に風雅の感なりしと我なりしも明逆の来日の陰晴をうらし庾高り永夜の吟嘯我顔すう乃おりむき相宜とし くその奥かりさなりしまへまけ為に一紙の雎蒿をうつすれみなに皆数

顆の雲玉我見るそらこれあまいはまの松の良村和歌の
浦の明珠まあるをやふ岡この尊和我むらるは岡ことに鄙
狗のそしまめりといへと世いさくの早懐我述て蚓蛇の跡我
よすらさらいふなるし

萩の上れ家まううけ岡まれ松ねわ乃なるさし月まおつとは
凡のつき雲の下萩うらそまきうらく乃家に月そこなる
うらあらすうらもさるなるを長月ふんあめ乃をさみなくすは
月紅もこうにさせてふきりし次とり出らし紀蓮我うきて
あらす乃ら袖まなりして秋の夜の月うら夏のあきなりけれ

ふなきまるまらく何我あられとて月みる袖乃家をかるしも
葉まもさらぬ月乃あらもてうきまる乃宿我ごふ人うなき
うらみしる雲てふ物の月になるは晴てうれし紀ひわやはそふ
ちれ夏の秋乃も中乃月よわもらくまさ名うう人まかこれ
月乃名我うへまさにおなしくは尊よわな乃紅まさもなへ
さけ松ふへ乃ら曉いけさてこれ紀乃よ和に月はをみなる
紀まみるもかくれ興わるに物乳ぬ月のうつ乃うみるに
月我志らふうらはねく入山まわ世乃ふけ我いつかいとりし
夜手乃葉にやけしてみる月やけるには家乃ま我照すへき
いかり國乃れきし我乃を到へ我さて月乃四和もましに行なり

道堅詠十首又前内和答

嶺上霞

[illegible]

[illegible]

餘寒月

雪[illegible]

山風や[illegible]

梅薫風

梅[illegible]

梅[illegible]

帰鴈遠

花[illegible]

[illegible]

山家花

花様へ[illegible]世ハ[illegible]

思久恋

[illegible]年月[illegible]

不逢恋

[illegible]年月[illegible]

朝眺望

[illegible]

旅宿夢

菜枕[illegible]

旅宿夢

獨述懐

[illegible]

永正十年正月一日　公條ノ試筆　前内府被加之

処々立春

梅ノ末にさけるさゝらさゝ花ハいつ里ハやりしかふ雲ハ公條

竜ノ里ゑ〻朝やうらとけるかすかすあつさしわくる雲乃ひかに前内府

遠山霞薄

消かくに雪乃光やまし明かこうすくうすせ山かく

水邊残雪

山ノ川ハきてゐへぬ雪乃下水にかゝ成多かきて末乃ゑらなく

梅近聞鶯

鶯ハちりきゝ家居なりぬしさく梅にゆへてぬ鶯乃しらん

柳先花緑

春ノせ乃吹やみどり乃雲乃色に花しわさまゝ乃春柳乃京

悲易緑窓

人ハいきこそれよりわきて悲ふやとだしりしわそさてやゆよりん

人傳恨窓

ほとゝ人ハしきりなりおもふへきことはのこさすこしやりてハ

山家客来

ことゝに我やと我乃こゝふ人ハおもへそわさまゝ山乃おくりぬ

花澗音清

夜しわやわ岡乃川原に吹りせ乃夢我しおとす峯乃澗川せ

霜鶴立洲

いく夜さて月の光もなかれすまいけるぬ君の霧の毛ふりて

同比道異詠十首　住吉法楽　前内府被和之

海邊霞

昨日国てけみさらし海のせの月かきに守めて淡路の田山

みすときゆおほの塩あいの月あれと月をみて淡路の山のもとなし

松間花

さく花の白まふしつむ殿の松けさ志ハ汎まあらかれて拾て

懐　郭公

あれむ夜も百明の月とる恋の淡路山のもとにはなくなり

江上月

かわにうく月の友ふもとかれてもおなしいに秋やなしき

野外萩

思ひうし汎のやとりもなまふてくらやかれなん雅の萩ハら

夕千鳥

雪（ふ）雪やはかり月の海の夕子こりかたしあとハ波に消つゝ

恋久戀

せく袖の月ふうにかれし年とへ思いつゝうらの月にあふへき

恨絶恋

今ハたゝ世をしのはゝなきこそのと絶ぬ人のうらみなるらむ

夜述懐

おもひねの夢さへ人にしられしとあらはれかたきむかしの寝覚に君ハ世をすてゝし

社頭祝

さかゆくハ我国のこのミちを守るかけて絶ぬ道に従ふ御神

月日　禁中にて花は我もみて前の内ハまとひてよせける　道堅

かへしとて

ふるき代ハおもひしれりとよその御ゆるしの花は世のならぬ雲の上の春

花とのみおもひしれるハ世の人のきこゆるしめさぬ春の

むかしにかへる春のみなかの契り有としる花やこゝろのうき

きゝ給ひて花は春しのこゝろしとよそ見えけり花の風の

忘れかたき有心かけの玉井の露をおいて契らん

春我へてうき世の外におもひやる心のまつは花によする

色見えぬこゝろの色は人のさてかはらぬやまのひきかへ

咲まかりくる九重の春のとる世はいつもかはらぬさくらして

そめけるは人の作るなる天津風吹よせ花のそめ出せ

みる御よるおもひしれるとは待るかは待つ花さかる

のこし　　前の内のかく

花ハ春に世の雲の上の宮にたちならひて春こそ我かな

志ゆへせし我やすれとも以ふそ花にこゝろもけふかきあるに花
おもふかれむしかは志ゆ須美乃ちかりけり乃ゆ苦乃なとも我
以くとせ我かれてもありし雲升ハ花ハいつ乃美ハありとし
忘れすハ花ものいはぬおもひ出ておけるとしちきりしるん
あらきなくうき世の外におもひしるあるとしかるのけるに
し日ゆる面ゆるなりわせハあらしるうこゝろとしめ我あり
いかしてかふ九重乃花ゆるゆる世我いかしへ乃美まくさん
みぬ人ハ心のうきりけるへてらそゆハをらかぬ笑音なりて
みほとはとの楽しゆる花のうこ乃おもひいつうかもしき
乃ゆ

但吉十首

海邊霞

霧なやうきりにかへゆりこ乃ゆ入日我さく我りくる志ゆ限

松間花

うゝみわしや花我いたゆる松ゆえハ凡乃やとわにおもふ乃ゆ

曉郭公

郭公有明の月我まち出て世にしるゆん人乃心我

江上月

見さるし我かもふしゆやし秋乃月世にしるゆ白乃老ゆの
まして

野外萩

[illegible]

遠浦帰帆

[illegible]

洞庭秋月

[illegible]

平砂落鴈

[illegible]

江天暮雪

[illegible]

七夕逆庭

[illegible]

行路荻露

[illegible]

初鴈連雲

[illegible]

秋夕傷心

[illegible]

對月待客

月ハはや待いけれ夜乃長来乃ゝをさしてうへの四をしらん

山家拵衣

山里をめしらぬ世をしらぬ世ハ人なるこの衣ゝ也

海道紅葉

秋乃ゝ色いけしくハあれと清みてこゝ我開らやそむる紅葉ハ

なるまいけぬなれこゝ月　そこへ

らくへぬ袖の露まかそへ雨

もさ夜乃友とハ月我さしてあしむしといふ志川人をて雨

よなしハ月しのおけらあしあれ当面ハまつ民乃なるよ

なく廉やこゝれ世ハ当ら乃ゝふ出我もいとのおもしの雅人

ほうさ寄さる孫我ゝしまいはつ通しさしぬきりくまとり当

さて雲乃立為まきふこゝ乃れ　本ゝ　伊鴈ノ孫の拵ゝをこゝて

袖らいりまれわ雨さる老しありとなくさめてし秋の夕作也

春日叢祠千載松　蒼髯鬱々不知冬

風聲枕上君須記　月落京華曉寺鐘

故人寄信鴈聲新　詩律歌篇慰老身

忽起曾遊台閣思　黄花依舊也良辰

菊花無處賞重陽　庭院秋深徑就荒

戸々可憐砧杵火　乱離楚越已三霜

右和歌七篇唐律三絶卒荅佳製以旱懐云

堯空

文亀元年九月廿八日　後土御門院御一回御製

弥陀乃名号我のうにをきて

なすむしれしちゝ乃おもいもなふなりてこ乃きゝ我月ハ三月迄

むし雲にしれしまゝ月乃ゆくにしたかくにしかく風ゆやかき

ゆぬ東乃三年のうちわ也くりまぬ三年ゝ月乃ゆ風乃西乾

方をしれしなくて乃秋乃ゆうゝやとさん袖乃月ゆ

まゝ風乃うて旬蓮のうへすまうへてとことにしれ月もうらめ

二東風て名なる秋乃月しうつ乃世のれわ世ま殆さりや

實隆上

なりへて世にいはれし姫の月その一まとれやうなり紀
むかしのちませ絶てし月紙にさ寄ハ光之れ世紙いませ
あはれいまあぬ四紙に絶ぬりあはむ吉年ゝ月ハ[illegible]
みなん人の心の内なるとも月も志れおりの姫の家のめくみえ
たくれなくしてふたもの家紙見ら世の月にあ内かけ[illegible]
いまあはにへるくかりの雲のうへをうし世の月も[illegible]
永正九月後土御門院十三回聖忌二卯内府詠のなりうへ
なりへあ　むそらにちく　あまれまか　君ハやまかり
まゆらけ　やくれむまふ　はなの所れ　なりしなき世ハ

むへしこれ　あゝあなり物こ　こうりうちに　たちうけハ
いりくさや　なきゆと紙き　むりしまて　秋も十とせ
見川紙ゑ　ききつ四れ　やち紙とも　なきゆうちは
むと玉せん　あきぬやうち乃　君御し祝え　[illegible]
いりくこき　なけき乃先に　むせふもん　あゆとふわ乃
こ縁の雲　きちゆの兒こ　ぬくりせも　月乃ひわを
なくむしの　むなしくなりし　江紙乃こ　[illegible]
[illegible]　いしゆおもの　なりふなり紙　むもれぬるの
あらゆえ　道に入てう　[illegible]　[illegible]
なりまて　六のこちゆし　あり[illegible]　見しハ[illegible]

きらいて　ぬるにかりて　はりつるも　なりはあれや
むりしへに　ゆうたまさる　川のりまて　角間のをとも
ぬえ行し　なるしなき袖を　もろうしを　あくる雲井の
見ましよう　きうとりわれ　ぬしてをとこ　なくあふくし
むすましく　あり寸おわえし　みくるとて　きて寸のり乃
かりせ袖を　なまりへそん　むら雲乃　有明乃月の
こうすくり　きをうぬちれ　ぬりくたの間し

反歌

長月やむりしゑれぬ秋乃そて君にむきにて雅乃家
このおりに我道堅法師まゝせ侍しかいと我り紀

より申て三女来二菩薩乃名号我あり句まよこ
てをうせしかは祝へてかへしつり寸とて又二菩薩乃
名号我よみくりへ侍り間

なる我う間よふむかしに世我はあくれのみきくしなしとたくおもて
何まりむりしいと乃こ思ふ君はやくかり間さるうらへはや
水むきふろくろ乃多しくうら寸ふうき板井に月寸めるこ袖
くうきましも乳まとはめやむ袖のうらはをしあけるにむかふ月新
ちる我うらこさて我めつるし有明の世乃祝なき家をさそふ花ハ
もくさきやむりしもるしすくきにしりしな民の利あるめくみよ
かりそむるきさたに露にむきりれ出し荷さて志るれ分間

うつせミ乃世乃ならひハ　さためなき世にさすらひぬる
ものおもひ　こゝろ五月の　かきくらし　なきてもあかし
らさしかり　こゝろの暮の　みつるらん　我も物いふ
おもはれし　志かハ何迄と　いふかひなくて　いまさらなにこ
いはえて　いえてもこんと　そのひをふかく　いまかゝこゝろ
この人に　筆にこめて　水くきの　なみだにまかせ
なかのかの　涙も袖に　玉とちる　夢きていて
暮乃け　ましてさらに　みちのみて　道のまよひの

十とせあまり　三とせの春乃　秋もいまだ　きかずハ有て
まちえかり　ごとハ細さえ　なく乃　ほのめとの
時あり一夜　一こゑそく　名のらふ　花さえあらま
ちるはなの　おもれハさらに　晴やらで　雲のえにも
五月雨乃　かこち寄ける　松のうへ　ものあはれなる
あまてし　さころ袖の　いかなるの中
晴るゝねは　ものあはれさらば　五月雨の　山ころしからはなみだのこえの

實隆上

永正十一年十二月六日 乾山和尚七廻追善

夢

志ゝ須うれいけ成うつのある世とて落てふ袖におとろかる也

幻

なきた田を為称あふぐも田かりかとりやさなるもいうなのまも

泡

時乃田に消てかしもふ水の泡の有やなしや為て生きるや

乾

いくかわかれぬ水のもなかれ月乃ちに袖ぬしけれ

露

消殘ゝ程も草葉の末の露いつゝ汎の如くとすも

電

うけろふやいなつ田なるし七年の雨のよくゝハ帰りて泡よふ

天文二八十六之詠之又首

もらすならごかれ極すとしいちこゝしも乃月乃君これ 初夕れ

こゝしごてみるへき月しもすゝれまさむふ佛のひかりのおそて

ぬしの孫に見しかあらぬ都まれ月う千里の秋の志を持こ
ハ礼るに見ひ此ハ心ちしまつしの面に名ゆる宮の月ハ
ことのみて我よりしものとふりはつる細ち月ハ面あまひぬる

天王寺五首

春夜

まれ人ミの四ましむる名殘ハ面ゆいらぬ花ハ面くかりて

夏曉

草殘ハ面小さ川ハ心ちしみしハ夜ハ面にもの孫の曉の宮

秋朝

黄木の口もあさ面なるなの雄雲ハ月やいつこと指あて

冬夕

夕ゝ礼の殘ハひわれ松竹の人ハまと面ハ雪の心ハ面

尺教

海てし礼絶せ無法の小さ面留諸川の末ハ也ハあらぬ

四月の比信吉天王寺ハ面ハ川へ出ゆきありて十九
日伏見へ向りて般舟院に志ひらくやすとて船の事ハ此
也ら

ほかほせて津よりの船出してうかに逍遥し侍り
ようとのうらに岡ほかなといふ所なとといふ所なとへ侍りえ
なみとやいふまつりまて夕点一とあはしてかの事
もいとをへてうらなん所のうちへわけるかなるへもし
おほし次なるに乃岡うまいなくはらくしかりに天照
庵とやいふ所よりこのつきとめいてくとてきたれる無あり
事になりかくて岡まちの月さしはりてうしかまいのこう
なきかとにあさきといふ所にはうてかみてあめをき
人を川縁侍りといとかしくしく志多へしてうしあやとりを
みちひきれてこのくいこうり侍りにをのくあのうちの夕

間しさもいとをれをてぬはとゆてけ所乃本堂なとうへき
よりしせしかうかしこみめくるもにいもこと葉しあよん
けり庄厳養廉のさゆるなん侍りて和泉堺南庄
乃光明院（光明院正那）にわむへのこしなとをくられしかハやとりあれて
岡の立しに堺の者とて人をあまたむへにきてれ足
まつ天王寺に岡うてさりしに石乃寺井乃もとに光明院
阿弥寺なとむへにて出来れ足するりちあれとまな
宮て金堂に岡いれりに舎利我順戴しおなしく日本に
りめてやうれの大般若經一巻爰なとわ持来の法華
經なと拝見しなる緑起（四王寺の）住僧讀ひ寸志川りに聴聞

て随喜乃涙をさへかけし法花経却かえて心のうちに思
ひ浮くを侍し
むしゑ乃夢ねしわやみぬ世我もこゝにたゞしく法のことのみ
諸堂巡礼寶蔵にて霊寶共ごとくく拝見宿緑後
ゝ寸有かくく覚侍り聖霊院にて四社とも我かゝなりて
奥乃ゝ見めぐり侍礼を浄土曼陀羅ゝら損してきこえ
かりなりこれなん西山上人不断念佛勤行ありし所なり
へきと往事哉感して涙をなりし侍ぬ亀井乃水掬て
まれにきてむしゑ亀井のうつるや浮木にあらぬたゞひかるゝ
一和尚道におあひて又首弁を納し侍し事我よろこれ
申され侍りかくてかよりしとやの坊にてさゝろきすめて
人くすゝうちやすゝてこれより住吉社に向ふて御
神示田ゝせ十首歌奉納せしめ所ゝしをかゝ神宮寺
にまゐてさゝろ所前の橋より松原にいてゝ濱のやうに道遥して
こ乃まくに住吉といひてなでハやせれ見をもいきやひろゝん
和泉の場に向りこ極とて道寸のゝ乃名あら所ごとれ
ぬくすゝてあらぬこものかより霰松原ごとふ所をすゝとて
これん世乃つ孫乃松の葉まも似す所のしらやうに
みし侍礼を
本りし乃吹きかゝるとみるかり名にあらはるゝ礼松ゝ

南庄光明院にいたりてさゝ〳〵いたりとてなされ行事
庵に着つれしかやの家爲称来れ里夕にあて又は寄
宿の寺へも向かわ行りあるは日ハ光明院より夢庵を
し招請して奇を向うけらゆ廿二日高野茶話の事
思ひ着らして家珀といふ者ゆ志るへとたのまてゆり
きらゆりさのといふ所に輿のきすへる程市人たち
さえきてる我みて

いつみなるさのゝ市人うちさゝ早きけるたりにいふ志しありなり
大鳥乃社信田木林なといふ所ごとうるていふの程
まゝ社あの前に輿のきすへる所へ根来よりのむかへと

馬二疋ひ世て人あまたいりまきたりて食籠給の物
なとも世をりおもひをゆるんおほし行し故寺の
十楊院といふハ尚阿一山の学ひ碩学のきこてありと
なん坊ハ昨日灌頂ゆれたるひて後朔のいとなと
さけしきれし才子乃實相院といふ坊まをひへきよし
の業内となんとかくして根本にいたりたりに元堂
人あまりきらゆるりてもしへ入るきのうしなり旅の風
れおもひなるぬ事に行れさゝ〳〵多氏しへして輿なり大門
のうち向て入うれしなりきけしなるへ（おこゝ）わ分向所に行り
ごなんくてすくに諸堂巡礼し行り山中みる物堵の

されハ玉葉に此寺乃観音乃四哥とて行事
何ゝ我おもひてもあり
純伊乃川我まゝるとて
水上ハ乃ときけしきの川のなゝのなまてあぬる所
川我也て山人の川原ゆこうきすへてをの雨
ほとゝ
こゝらそあまつゝとすゝりれきの川水のあさまゝりして
郭公の聲ハ我こゝにてりめてきゝ行ふこゝハ雨
なして法のみめ乃して為ゝこれをさりし詠んなて
いく聲もきゝこゝになゝかしきすいつれのやまとさてみましを

此道ゝの外と我くて十八町乃坂ハ四十八町かれ
一里のと我さ所にもありて俗に諸翁なりとやゝ
とて周桂法師ゝ蔵こ
面出とはみ川を出てゆれ君わ法翁なりかゝふの居る
かなくて山中まゝわて雨甚しく風もまゝくて元し
行やゝ寺谷より吹乃わる此我ゝきてさらに雨し
すゝみゝきこゝりて山のうへに輿のきすへてありしハ
老の後ゝしに我ゝるものさしに為と雨風の為我ゝさし
かゝりして此すゝやゝかし高野のゆ山にのわり
此きて一心院の奥房とゝまゝりて人ゝやまみ

なほと高野山の類に聞へしかハ

高野山佛法僧の賽銭よろまつりきこえすなと高野山

廿四日草鞋をはきて諸堂巡礼し侍れハ大塔ハ

柾ともたち心柾かときりて造作のありしかハ金

堂ハからのこくらうてきさ闘なかり三社の社しも

そのハ焼てうれしき社おひそていきつめくらかねにて

今ハそのまゝ川焼やちつらん子とせ乃まつしおもしろかり

奥院へ御廟の道次ゆきて銭まうしにしおもし

やりかけまきらあり礼さありてこさゝみなん

やりそめやあまり見えたる雨ふしたゝ袖のうへ句なし此の山路に

四廟の前乃堂 三鈷供養の堂也 灯明そのゝ其おほくひらめく

やきてえいいちす侍侍いてのちて大師御所持の念

梓水精の御念珠なと頂戴せさせられ侍き

あふさ聞て三所にいふく高野山のいりつき寺の戸伊ちハ

内より結ひられし凡のこも銭たさめらてまつる

凡乃上厘より所乱の為銭うまて仏のうちハ手にいれて

裏端書付し

この頃ゆめきてつちに卒都婆をたてさせ侍り其外は

ゆるき卒都婆あまたたてさせ侍き人その髪

拙くさゆる裏繋と

うしゝ王のそのかつらの一まらにやうらぬなくこゝろはかけてよ
見ゆるのとし此かつらの遠とりと見ゆるせらる六記
音乃像あつらしく造立させ給ふに服ゆしまりせ
のこゝろ世あまりに給ふ故おもむとて
いつえかり法をうしましむらひとゝ落ちしけるつゝ乃身也
らしゆのよろ川故のまし口のものはてハ我身をすてさりつゝ
還向の居そら晴て日の光あきらかなりしかハ
雲霧の内よりしもきて出る日也ふのいのり故元にうつ見
廿五日有明の月の出るゝ故こて
高野山この暁の月にしまついけるかとゝ年かりける

宿坊をいけてさらけ給し
なりし入し一心のおく聞きてうたちの世故いかにせん
かくて根来乃十輪寺に門きて給ふに長人
て講問行ぬ故聽聞して
今日ハ岩根松の好しき道故ゆきれてぬる法乃返るゝ
廿六日いまたりしにまてこれより和奇吹上に見
給ふしうの志之給ふしかしせて給ふへし又連
歌し一座なとさ内くこゝめやせしかとしこえさしぬ事
とてそらに出給ふかと蒼白とて頻にこれ給ふ
筆ゆ内のせて

郭公なく祢山なる源山なり

かくてさのこふ所のすこしなりハ大ゝらゝ宗伯主
してむかのやすきにハ川ぬかとこのへなりしめつゝか
まなん高師濱の松原のした天神の社の前にて
をしてく

袖のうへに松ふくれやあゝ浪のなしめてゐ岡の名ゆもしらん

常に勝まりて堺にかへりけるぬ

廿七日ハすこしらやすきぬれ宗仲か寮にて一盞
なと作りき廿八日ハ阿弥陀寺へ招請ありしかハ向
て大師カ所作の弁才天なり拜見せうとくなり

ちかき寺の風呂に入て夕つきてかへる雅堺の濱見
めくりて光明院に向しかハ宗碩京より向ふてきて
向京の事とも申さのへぬらしゝ作りいとうれ
しくなん廿九日高野參詣の前より廿首題をく
りうらしぬ久ゝ着庵にてうりさぬへきらしありしハ
かさに向りて作しに歌舞にをよひて共興あさ
ゝらす

旅宿 郭公

いさといハて都の所とう愛岡くるさうハまちしきほとゝきすゝ

江上眺望

漕かり入口乃毎の夕なるにはかりしたるとのうらく

寧松本憲 但此哥を宗碩と書し

文本ひくしるまにてふる山ひこはわうらもいてなくはしるまや

五月一日光頭ごふ者連歌無行すべきよ頻

何路 まゝ行しかハ光明院にて一座ありしに

濱松のなりやうてしこ事ゆゑ

見ゆ夏かしき浦浪乃しゝ忽 梵舟花

すゝしき我光に月ハ秋立て 宗碩

二日堺我たちて住吉に向ふて四郎未向てせ

ておかれ候へ 笠

郎も又まゝ何としうおもふ 笠ゑや立ゑ浦乃波乃忘なふ

天王寺に向うてゝいさゝの心さし乃所ありなと又

たてまつるせ給し 亀井乃水にて

住前乃奥も志ましむとしいさゝ浦亀井乃水乃姉ゑ心ハ

西門乃念佛堂にハ武庫山出現の旅陀三尊

太子の四筆いまに儀我をうり唐ゑらまさせる筈

導大師ホ多四乾し此所にあり 服精生身にむ

ゑかかとし此堂にかん西行法師の庵もありけ

とゝや一とせの地震にそこけるせぬるらしおゝ行ゑ何ん

れならまかり此本尊を何にて拝見して

うけしとめてやこ我うてゝ可玉やもとむこのむかいてしかれは
うくまて博しかの元ゝ分いと由こゝ仰ゝ我れこゝ川
ごつゝ所由てをのしきたひまうてゝかしこまて光明院
玄海のうれいひ分とはうけてゝれかゝれ仰き後
邊まて能勢源の良輿馬人分とむ人ま我こせてゝ
より船まのり伊豹山しいたる程能因法師かゝ井ま
み極る伊豹山しおもひ出れ仰り樓乃岸分と呉を
うとゝ呉所より大口れのあいではことはいまし松
乃ミみとりまみて仰り
名まゝて当うの世のまゝかぬねやや大口の山の志る人しかる

分りゝ乃まゝりゝゝあるほと四ちゝけしゝ海堂川祢も
み須通ゝ海ゝ分もしゝこうとゝせしゝ
橋ちしゝかりぬる跡もごふへまゝ我ゝ分しゝにゝれとゝゝ他
ゝれゝるほとゝ茂川のいゝ吉住寺といふ所の塔ゝ
つまてあ見ゝ間日おきちしゝ雨ふりていとわけ水世
瀬ゝ間りて川新堂ゝ間いりて志もらく念誦し
てそれより我ゝ我もむきてさるのをりけりに
け蓮屋りゝりけるぬ